

# オスカー・グラーフ ツェツィーリエ・グラーフ・プファフ 編著 『日本の妖怪』 シュトゥットガルト、1925年（2）翻訳

安 松 みゆき

過度に余白に負担をかけようとも、ここでより厳密にこのようなあらゆる存在を取り扱いたかった。そうしたものの度胆を抜く独自性は、不可思議な特徴を持つ絵から容易に察知し得る。

冬の嵐が荒れ狂っているとき、閉めきった店の戸をたたき、枯れた木々がうなっているとき、暖かく互いに寄り添って、燃え盛る石炭の入った火鉢を囲んで腰かけているとき、訪問者の友人が長くて新しい魔物（Geister）の歴史の話に耳を傾けることは、どんなに楽しかろうか。熱いお茶をすすりながら、愉快でありながら気味の悪いもの、すなわちポルターガイスト（Poltergeist）や悪霊（Dämonen）生き物に変化する古仏具、そして百匹の悪霊（Dämonen）たちによる、まさにヴァルブルギスの夜（Walpurgisnacht）（図4から図9）がすべて過ぎてゆくのをみるのである。

そのことを、土佐光信（Tosa Mitsunobu）の後、1831年生まれ、才能に恵まれた暁斎（Kiosai）が、忠実に描いている。化け物連中らによる狂った騒ぎのなかに、筆舌に尽くしがたいほどグロテスクな仏教僧のカリカチュアが認められる。うなり声をあげたり、キイキイ騒ぎながら、僧侶にしがみつく2匹の鬼（Onis）が行進している（図4から図9）。

これと同様の悪霊の行進を国芳（Kuniyoshi）は見ていたが、それを絵師として夜の暗闇へと押し込んだ。また国芳は、かれの懐疑的な見方、すなわち、酒（Sake）がある者の目を開いたとき、このような化け物の姿がおそらくはじめて見えてくることを暗示している。というのは提灯などの下であちらこちらに見える謎めいた言葉は、酒と引き替えたものだからである（図3）。

国芳は、幽霊画シリーズ（Gespensterbilder）を制作したが、そのうちの16枚は入手可能なものであった。一部はわずかな色のつけられた水墨画だが、一部は完全に彩色され、そこにはこれまでにあげたものも含まれている。絵画的な力量は、夜の深みから浮かび上がる無秩序な化け物の姿に認められるが、そのような力は、他の浮世絵師の誰にも見出すことはできない。

国芳は豊国（Toyokuni）（1800 - 1861）の弟子であり、芸術家としての個性を持ち得ているものの、これまで十分に評価されてこなかった。かれは、創作力と創作の多様性を持ちあわせており、さらにかれの最良の作品には、偉大な土佐派の子孫が、土佐の絵師を尊敬していたことを、わずかながらも思い起こさせるような感情の本質と深さが備えられて

いた。絵画的なロマン主義の行列は、われわれの16枚の幽霊画の全続きから構成される。この行列は、深夜に墓から蘇る狼男のような粗暴なものではなく、不気味な野蛮さを示している（図125）。

忍び寄る悪霊たちは、おそらく臨月（Ringetsu）と呼ばれ、夜ごと悪夢をもたらす鬼であろう。その鬼たちは屋根の上ののって不可解な音をたてたり、女子供のいる隣人を眠りから覚まして驚かす者と思われている（図124）。

それよりも一層奇怪なのは、おそらく淡彩で彩色された小作品において語られていることであろう。ひとりの農夫が何も知らずに、家のなかでも人気のないところで、何かある道具を探している。農夫はぎょっとして飛び上がり、驚きのあまり倒れてしまう。部屋の隅には三つの目を持った悪霊（Dämon）の三ツ目（Mitsume）がしゃがみ込んでいたからである（図122）。三ツ目といっても、目が1つ、あるいは目が2つの例もある。

物騒なのは、魔法のかかった家だ。長い間廃屋となり、蔓と草が伸び、そこでは静寂な日常が展開している。しかし、昼間には見えない不気味な客人たちが、その建物を占領しているのだ。不謹慎なものが大胆にも建物の中に入ると、ただではすまない。まさに大騒ぎとなり、かれらは家の中で好き勝手なことをしはじめる（図11）。

これら生き物がどのように生み出されたのか、すなわち自然の物質的な力からのイメージに由来しつつも、部分的に原始的な宗教の意味を持つことを理解するには、及ばないだろう。伝説や民間信仰では、中国あるいは場合によってはインドから仏教とともに始められて伝わった神話の動物が、一部ではあるものの相当に重要な役割を果たしている。

神話の世界に登場する動物の中で最も突出した存在は、龍である（図26）。中国では、最も高貴な神秘的創造物の象徴となり、一つの輪で表現された2匹の龍の陰（Yin）と陽（Yan）は、肯定と否定、男性原理と女性原理、生産と絶滅、光と闇、それとともに、あらゆる信仰の教えにとって根源的な考えである善と悪を具現している。

中国では龍は皇帝の尊厳と権力の化身でもあり、皇帝の顔は龍の顔と言われている。この見方は、日本にも伝えられた。それゆえ、皇帝を直視すると命取りとなるため、皇帝は御簾の後ろに隠れていることになった。

博物史的な龍についての歴史もあり、有名な日本の作家である馬琴（Bakin）がそのことを「八犬伝（Hakkenden）」のなかで詳しく述べている（図30）。

数多くの龍の中で一番重要だと言われているのは、天の龍である。この龍は神々の住まいを支配し、かれらが没落しないように守護している。目には見えないが、どんな姿にも身体を変えることができる。

雨の龍がアマリオ（Amario）である。海の龍は海の支配者である。リュウオ・キオウ（Ryuo Kio）は、海底にある美しい豪華な龍の宮殿の竜宮城（Riugu-jo）か、あるいは湖に住んでいる。黄色の龍は、中国人によって特に尊敬されている。というのは、その龍は、先史時代の賢者であるフヒ（Fu-hi）に、神秘的な印をもった役割をゆだねたとされるからである。その印から、賢者は文字を学んだのである。

最古の伝説によれば、リュウオ・キオウは、海底でなくした釣り針を探しに出た神の息

子彦火出見（Hohodemi）に栄枯盛衰の宝石を贈ったという。またその後で、勇敢な英雄たちが海の王の宮殿にたどりついている。

龍の恐ろしい敵は、無数の足を持ち、龍の種族を世界のはじまり以来追い回し、勇敢な戦士に助けを求める百足（Mukade）であった。

有名な英雄倭藤太（Tawaratoda）は、反乱者将門（Masakato）に対して天皇によって派遣され、厳しい戦いののちに勝利をもたらした。倭藤太が、天皇の足下に置くために切り落とした将門の首をもって、喜びながら琵琶湖（Biwasee）のそばの瀬田（Seta）の橋を渡ろうとしたとき、巨大な龍によって渡れないことに気付いた。その龍が橋の中央に横たわっていたからである。倭藤太は、後ずさりせずに龍の上を越えていった。かれが対岸に着いたときには、嘆き悲しむ声が出た。振り返ると、類いまれな美しさを秘めたひとりの娘がいた。

彼女は、琵琶湖の龍王の娘の乙姫（Otohime）であった。乙姫がかれに次のような危機を訴えたのである。すなわち、恐ろしい百足が琵琶湖を破壊し、彼女の父親や家族に最大の危機を与えており、すでに龍王の子供の何人かは、むさぼり食われてしまい、今また彼女自身を威嚇している、というのである。数日来、彼女は橋の上で、勇敢な武士が来るのを待っていたのである。そして彼女は今、倭藤太を見出したのである。

この英雄は、彼女を湖の宮殿に連れて行き、夜を待った。まもなく百足の目が火のように燃え盛り、百足の長い節の入った体が、燐のように光り、7回にわたって三上山（Mikamiyama）に絡みついた。倭藤太は矢を2本放ち、巨大な百足をしとめた。龍王はこの倭藤太にすばらしい贈り物を与えて、波の王国から解放した（図27）。

対岸にたたずむ武士の堂々とした身振りとは対局に、乙姫の長い黒髪の波は水の深みに注ぎ込むような静かでしなやかな動きを見せ、また水面に現れる乙姫の姿は寓話的で超自然的なものとして、国芳は、個性的、かつ、単純で詩的な様式によって表現した。

仏教も、寛大な理解によって、この民話にひとつの領域を与えた。有名な僧侶法然上人（Honen Shonin）は昔、さくら湖（Sakurasee）にある小さな祠のなかで祈祷していた。上人はある夢を見た。その夢のなかに美しい娘が現れ、彼女は自分が恐ろしい病気にかかり苦しんでいることを、泣きながら上人に訴えた。同情した上人は、その病人が龍王の娘であることを見抜き、とにかく彼女のために祈祷すると、まもなく彼女は病から回復した。

この夢を作品にした国貞（Kunisada）（1787 - 1865）は国芳の世代でもあり、中期にはかれの最良の作品が作られているが、晩年になると、多くの場合変化に富むものの、構成と素描法においては粗雑となった。前述の1枚（図28）は、かれの絶頂期に制作されたものである。

すでに前に掲載した（豊国（Toyokuni）の2人の弟子の作品よりもおそらく半世紀前に作られた）鳥山石燕（Toriyama Sekyen）による、夜の百匹に及ぶ化け物からなる「百鬼夜行（Hiakki Yagio）」には、女の頭を持つ極めて幻想的な龍が、鐘のまわりに巻きついている姿が描かれている。それは龍のような蛇であり、たしかにそれが重要な役割を果

たず伝説は、日本の中世独自のものであり、頻繁に芸術表現に取り入れられているために、能（Nospiel）の道成寺の謡（Do-jo-ji no Utai）もこの話を扱っている 龍のような蛇は、見落とされてはならない。

四国（Shikoku）の近くの内海へと注ぐ日高川（Fluss Hidaka）の河口からほど遠くない人里離れた森の谷には、観音（Kwannon）を奉るかなり古い僧院の道成寺（Do-jo-ji）がある。

本堂には、後小松天皇（Go Kommatsu Kaiser）が書き記した貴重な巻物が保存されている。それは安珍（Anchin）僧侶の物語を伝えている。

ここでは醍醐天皇（Kaiser Daigo）（898 - 930）の時代に20人の敬虔深い僧侶たちが修行を行っていた。そのなかに若い修行僧の安珍がいた。かれは敬虔で博識があり、そのためかれはその僧院の誇りであり、希望と見做されていた。毎年かれは、熊野（Kumano）の那智（Nachi）近くの宗派の本坊を巡礼していた。その帰途には、いつも真砂（Masago）の村の長のところに立ち寄ることにしていた。この長には、とても利発で美しい娘、清姫（Kiyohime）がいた。安珍は、この娘にちょっとした御土産や、薔薇の冠、あるいは身代わりのお守りを渡すことを一度も忘れることはなかった。また、彼女に美しい物語を語り聞かせたり、敬虔な歌を教えた。そのため、まだ子供の清姫でも、かれに夢中になり、待ちきれない気持ちでかれが来る日を楽しみにしていた。

さてかれが一年たって戻ってくると、清姫は年頃の女性になり、生きる喜びと美に満たされてかれの前に現れた。また清姫自身も、その敬虔な僧侶を別の目で見ている 激しい情熱が彼女をかき立てた。その情熱を、彼女は、視線や身振りで隠すことはなかった。また安珍も燃え立つ動揺を感じずにはいられず、2人の目は合い、彼女の手がかれの手に触れた。

そしてかれは、神への誓いを忘れた。だが、それは一瞬のことであった。かれは恐ろしくなるとその場を離れ、夜中に彼の僧院へ足早に逃げ帰った。

数日間、かれは絵に描かれた観音像の前で苦悶した。しかしその観音（Kwannon）の純粋な面影にかわって、清姫がかれを追い立てたのであった。彼女の眼差しを夜ごと感じ、薔薇の冠に触れる度に、いつも彼女の手を握りしめた感触を思い出していた。もはや落ち着くことができなくなり、観音を奉った31の堂を参拝することにした。そこで改悛し、観音にかれの恐ろしい苦境からの解放を嘆願するためであった。

一日中、安珍は清水寺（Kiyomidzu Tempel）にひざまずいていたが、その横で白いベールで覆われた女性が、泣きながらそして震えながら祈っていた。それは清姫であった。彼女は、自分の隣で祈っている者に気付いたとき、自分の願いが観音によって聞き入れられたと思い、必死にかれの手を握った。その瞬間にかれも彼女の手をしっかりと握り返した。と同時に彼女の瞳の奥に、完全に罪深き欲望を見た。そのときかれは観音に目を向けると、観音は憤怒の形相となり、しかも反逆者をこなごなにするという燃え盛る棍棒を持ってかれを威嚇した。ぞっとした安珍は彼女から離れ、そして逃げ去った。

清姫の心には、そのときにどん欲な渴望とともに怒りが込み上げていた。

ある暗い嵐の夜の、丑三つ時(午前2時)に、清姫は、髪をぼさぼさに振り乱したまま、白く緩い服を身にまとい、「丑時参り(Ushi toki mairi)」の恐ろしい魔力を引きだすために、聖地の金毘羅(Kompira)にこっそり忍び参った。金づちと釘、それにわら人形を持って聖なる樹木のところに向かった。安珍が彼女と一緒にいるか、あるいはゆっくりと苦痛を与えつつ死を遂げるようにするのか、という、ぞっとするような呪縛を唱えながら、清姫は、愛する人のわら人形を樹木に十字架型にくくりつけた(図121)。そして清姫は、無知蒙昧の恐ろしい神々を呼びだして、魔力の呪縛が働かないときにでも、蛇のような龍になって復讐する力を得た。

一方哀れな安珍は、巡礼地を参拝し続けていた。しかしどこにも落ち着けるところは見い出せていなかった。一瞬の誘惑に負けた罪に対して、かれは十分に改悛したようには思えなかった。

かれは、那智の大きな瀧を詣でた。というのは、そこでかれは21日間、瀧に打たれた聖人文覚(Mongaku)の改悛に習うためであった。

この厳しい苦行の末、滝つぼから出てきたときには、落ち着きと希望がかれの心に戻っていた。再びかれは観音の前に行くと、観音は、穏やかで慈悲深くかれに笑いかけたのである。そして崇高なる平穩に満たされて、安珍は家路に着いた。

ところが、日高川の岸边では、清姫がかれの帰りを待ち伏せていた。浅瀬で彼女は、かれの行く手を阻み、彼の前にひれ伏した。再びかれへの愛が蘇り、彼女は切にかれの名前を呼んだ。安珍は、彼女を見ることもまた彼女に耳を貸すこともせず、絶え間なく「南無阿弥陀仏(Namu Amida Butsu)」を唱えた。そしてかれは浅瀬を横切って過ぎ去っていった。

甲高い声で、清姫は、さらに3回「安珍!」と叫んだ。そして彼女は、墮落の神々に助けを求めて叫び、変貌のための不気味なまじないを唱え始めた。すると、彼女の愛らしい姿は、とぐろを巻く恐ろしい龍の姿のなかに消えた。彼女の髪は炎のように振り乱れ、目は燃え盛る球のようであり、長く裂け目の入った口に圧迫されている牙、そして長くとがった爪が、空をつかんでいる。うろこのついた蛇の体はとぐろを巻いている。炎が彼女の口から燃え上がる。草や灌木は炎に包まれると、彼女は飛び去った。もうすでに彼女は、安珍に近づいていた。安珍は足を早め、間一髪で僧院の間際まで辿り着いた。かれのすぐ後ろにびったりと龍の吐く灼熱が迫っていた。

僧院の前庭の低い基壇の上には大きな鐘が置かれていた。ほんのわずかな隙間がそこに空いていた。鐘の縁が、石によって少し高くなっていたのである。もうかれは、首にまで燃え盛る灼熱を感じていた。鐘の下のわずかな隙間に近づいて、安珍はそのなかに滑り込み、石をどかした。安珍は安堵した。

ところが、龍の清姫は、荒れ狂って甲高く叫びながら、のたうち舞うなかで鐘に巻きつき、煙や燃え盛る炎が鐘を取り囲み、炎は屋根や前室の木組みを呑み込んだ。炎のしゅしゅという音のなかで、恐怖におののく安珍は、再び絶え入るように「南無阿弥陀仏」を唱え続けた(図29)。

しかし高く砕け散る炎のかたまりが鐘を呑み込んだ。僧侶たちが、燃え立つ炎と灰のなかから、鐘をまっすぐに起こすと、安珍については白い灰のかたまり以外に何もなくなっていた。

龍よりわずか後になると、中国の妖怪狐が、日本の民間信仰のなかに加わった。光や、精神的に崇高なものの根源を表現する最初のものとは逆に、狐は、下等で不気味な力を持ち、嘘で人を惑わす姿に変化し、人間を破壊するために人間に忍び寄る悪を具現する。

狐は不気味な魔力を持っている。狐が百歳になると、自らを好みの姿に変えることができる。千年たつと、毛が白色か金色になり、そして9本の尻尾を持ち、今まさにあらゆる動物のなかで最も危険な動物となるのである。狐は、無限の顔と、すべてを聴くことのできる耳、過去や未来への知識と、あらゆる人間の魂を読み解けるような才能を獲得する。

例外として、稲の豊作に対する善き神である、稲荷（Inari）の狐がある。神の使いとして、それらの狐は好意的であり、民衆はその石像にちょっとした悩みごとを願う。

9本の尻尾を持つ狐、ほと狐（Hoto Kitsune）は、支配者や卓越した人を偏愛する。しかしその破滅を、ほと狐は目当てとしている。たわいもない人々の場合には、狐は意地の悪い冷やかして満足する。そして中国の古い歴史では、この9本の尻尾を持った狐の化け物は、さらに帝国の衰退を導いた。

この最も有名で最も注目される狐の歴史は、古い歴史的な口マンである「封神演義」（Fêng-Shên-Yen-I）の導入部分、つまり神々のメタモルフォーゼを形成している。作者とその制作年は不明だが、初版は17世紀にさかのぼる。小説そのものは、商（Shang）帝国あるいは殷（Yin）帝国の衰退と、紀元前1148年から1122年までの趙（Chou）帝国の支配の過渡期を扱っている。この出来事自体は、歴史的に正確に伝えられている。ただ超越した力の不確かな作用による出来事の原因付けは、文学的に装飾されている。

「封神演義」は、のちの日本のあらゆる狐の話の模範となった。とはいえ時折日本の民話からの要素が、そこに組み込まれているにすぎない。ここではできるかぎり、簡単に枠組みだけを紹介したい。というのは、オリジナルでは歴史的な骨格が、道教の聖人たちによる幻想的な詩の原生林に覆われているからである。

皇帝紂王（Chou Wang）は残酷かつ好色ながら、偉大な精神の天分があるとして叙述される。いわゆるネロの天分「それは神々も死者にも心を配らなかった。」と。

かれは毎年女神の女禍（Niu-Kua niang niagu）の誕生祝いにその女神を奉る神殿に、皇帝の義務を捧げるために、皇帝の忠実な大臣からの強い進言を受ける。

今、女神像の前の幕が引き上げられると、その像の色香が皇帝を熱くさせ、かれは神殿の壁にひとつの詩を書き記した。それでもって皇帝は、女神の栄誉をたたえ、女神は、皇帝に宮廷の妾として仕えることを堂々と説明する。従者は、冒瀆的な行為に驚き、災いを予言した。

女禍は己の緑色の孔雀の上に乗って神殿のところに降りてきて、詩を見た。そして神の完全な怒りを、雲の上の神殿へと急いで伝えに戻った。五色の旗で、彼女は悪霊をすべて呼び出した。嵐が荒れ狂い、黒い雲が宮殿のまわりに垂れ込めた。この世のあらゆる悪霊

が集まってきた。女禍は、千年の狐の魂を選び、次のように語った。「私の隠された命令に耳を傾けよ。紂王の運命は尽きようとしている。かれは帝国を失い、孔雀が岐（Ki）山の麓に鳴いた。そして西では、ひとりの賢い支配者が誕生する。汝は今悪霊の姿に変化せよ。皇帝の宮殿では、別の顔をして、領主を誘惑せよ。」

悪霊は、彼女の前にひれ伏して、彼女の恩恵に感謝し、そして消え去った。

皇帝は、女禍を見て以来、もはや彼の美しく高貴な后姜（Kiang）もかれの数多い妾も気に入らなくなった。「彼女たちは、皇帝にとってまるで埃や灰のようにしか見えなかった。」どこにも皇帝はやすらぎを見出すことができなくなった。そしてかれのお気に入り、陰險な犬渾（Yu-Hun）とおべっかを使う貴仲（Fei Chung）は、次のような命令を提案した。すなわち、皇帝が楽しみとして、女神と同じくらいの美人を見い出せるように、美しい娘を千人ほど高貴な家系から探し出し、皇帝の前に連れて来るといった提案である。

一番年長の老宰は紂王の前にひれ伏して、かれに命令を取り消すように嘆願した。「民は危険な状態にあります。領主たちを悩ましています。天には悪い前兆が、さらに支配者の宮殿は、美しい女性であふれています。」このことから命令は実行されずにいた。

皇帝のお気に入りの貴仲（Fei）は、皇帝に進言するために玉座の前に現れた。封建領主たちのなかで、領主の蘇護（Su Hu von Ki-chou）は、途方もなく美しい娘を持っており、大輿を飾るのに彼女以外にふさわしい娘はいないことを伝えた。

蘇護は広間に呼ばれ、紂王から直に蘇護の娘を妾にすることを要求された。この率直で厳格な性格の、かつ名誉ある男は皇帝からの要求に大きな怒りを覚え、勇敢にもかれは皇帝に、「皇帝により多くの享樂を与えることは誤りです。それでは天と地の間のきずなが壊れてしまうでしょう。賢さという言葉は、誰の耳にも届きません。自分の娘を民に害を与えることになるため、決して私は宮殿には連れて行きません。」と返答した。この大胆な反論は、皇帝を激怒させた。皇帝は、蘇護を反逆者として捕まえたのち、かれに死刑を言い渡した。そこで、改めて一番年長の大臣が、仲裁の労をとり、かれは皇帝に、蘇護はいつも誠実で従順なため、かれが死ぬことになると、民衆に反乱を起こさせることになるだろうと、もしもかれが恩赦を受けるならば、民は、皇帝への崇高なる美德を認識するであろう。さらに蘇護自身も間違いなく感謝の念から、彼の娘を差し出すであろう、と具体的に説明した。

そうして蘇護は恩赦を浴し、急いで逃げ帰ろうとしたが、それまでなされた無礼に興奮し、馬に乗って逃げる際に、午門に次のような詩を書き記した。

「領主は、かれの家臣へのきずなを絶った。

領主は、5つの基本道徳を次第に低下させた。

蘇護は、もはや商王家に娘を嫁がせないだろう。」

この言葉は、紂王にこっそり知らされた。なぜならばこの言葉は皇帝に対する反抗を

意味するものだったからである。軍司令官は、領主蘇護を懲らしめるために、斧と馬の尾をもって武装した（これは、軍が動員されたことを意味する）。蘇護は、何が起こるのかを予測して、十分に準備をし、覚悟していた。冀州（Ki-chou）の門の前で、皇帝派は殴られ、屈辱的な脱走をする者は、大方虐殺された。ただ指揮官の数名のみが、逃げおおせることができた。

第二軍団は、こちらに向かってきたが、しかし武器によって決断することはなかった。というのも姫昌（Ki Chang）という賢い西の封建領主が、巧妙な文書によって、蘇護を納得させることを知っていたからであった。「娘を皇帝に引き渡すことのほうが、長い戦いで国と民衆を失い、家族を死にさらし、先祖を犠牲にするよりは、ずっとましだろう。」

蘇護はこの忠告を快く理解し、妻に、娘の妲己（Taki）を美しく着飾るように命じた。50人の召使いが彼女のために選ばれた。そしてあふれ出る涙のなか、その善良で、まもなく16歳になろうとしていた娘は、絶望感でいっぱいの母と兄弟たちに別れを告げた。蘇護は、娘の馬車を、三千ものつわものとともに、はるか彼方の首都まで見送った。

行程の半分にまでさしかかったところで、夜のため恩州（En-Chou）に一泊することになった。不快な気分であった父親の蘇護は、目を覚ましてしまい、戦闘芸術についての本を読んでいた。二回目に夜中に目を覚ますと、突然ものすごい嵐のどよめきが起こった。それが蘇護の心の底を揺り動かした。蠟燭の火はすべて消えた。蘇護は新しい蠟燭を持ってこさせようとしたが、その者は、蠟燭を見つける前に、妲己の眠る後ろの寝室で、恐ろしい叫び声を耳にした。「化け物が現れた！」

蘇護は、鎖の鞭を握りしめて娘の寝室に急いだ。娘の寝室のカーテンをひくと、彼女は横になって静かに眠っていた。かれは呼びかけた。「私の子供よ、寝ている間に化け物がおまえに襲いかかってしまったかと思った。おまえはそれを見たのだろうか。それとも見なかったのか。」妲己は答えた。「私は夢のなかで、召使いたちが、化け物がそこにいる、と叫ぶのを聴きました。そして私は蠟燭が灯っているのを見たのですが、それが御父様であったとは知りませんでした。」「それは天からの救いだ。よかった。」この言葉を口にして、蘇護は退室したが、それでも、かれは落ち着いて眠ることはできなかった。

かれは、自分と受け答えした相手が千歳になる狐であり、もはや妲己ではないことに気付かなかった。蠟燭を部屋に持ってきてもらうのを待っていたが、それにはかなりの時間がかかった。そうこうするうちに、妲己の魂は狐によって吸い込まれてしまった。そして狐は妲己を死に追いやった。狐は紂王を欺いて、かれの帝国を滅亡させるために、彼女の体に移ったのであった。

「恩州に、不思議な風が吹いた。

それは虎の怒号ではなかった。

では龍のすすり泣きだったのだろうか。

数多くの不思議な存在が、水や山岳のなかに潜伏している。

そこだ。泣き悲しむ風の吹く実体のないなかに、2つの目がある。



まるでどんよりした霧のなかで、光を放つような。  
邪悪な息吹の重いなかで、4つの爪を見つけた。  
はっきりとしないが、鉄の鉤のような爪が、濃赤色の朦朧としたものから突き出ている。  
ぎょっとして、蘇護は、自分の鞭を握りしめた。すると、魔の風がかれの明かりをかき消した。  
16歳の愛らしい姿は、すでに息絶えていた。  
そして彼が個人的に肉と血として考えたものは、幽霊であった。」

朝歌（Chau-ko）に到着したことが伝えられると、蘇護は謁見を命じられた。着飾ることをせずに、かれは反逆者の装いで、紂王の前にひざまずき、完全に激怒した支配者に我慢しなければならなかった。この支配者は、最終的に妲己を連れてくることを命じたのである。

妲己は、儀式に合わせて近づき、会釈をしてから次のように言った。「万歳！ 犯臣の娘、妲己は、皇帝陛下の万歳、万々歳を御祈りいたします。」

彼女の美しさについて、ある詩人は中国の理想を重ねながら次のように叙述している。

「黒い雲は、彼女の（風などで）膨らんだ寝髪に比するもの。杏子色は彼女の顔。桃色は彼女の頬、やさしい姿とほっそりとした腰。彼女は、太陽の光をたくさん浴びたさくらんぼや、雨の降った後に元気づいた梨の花に比するもの。ヤヂ（Yade）宮殿を離れるときの彼女は、月のなかのチャンゴ（Changugo）に匹敵する。口を開けた赤い唇はまるでさくらんぼのようだ。その口から舌の先を出したところなどは、比較のできないほどなまめかしい表情である。

彼女が目を開けると、その目はまるでアーモンド形をした孔雀の目のようだ。まばたきをすると、魅惑に満ちたいはずらっぽさが感じられる。」

このような彼女の姿と言葉が示しているのは、紂王が、天に昇る心地となり、かれの魂は新しい天の領域に逃れてしまい、まるで骨の抜けた状態となり、目が飛びだし、何をすべきなのかがわからなくなったことである。

今、紂王は、寛大となり、蘇護を立ち上がらせて、高い地位と高い収入とを与えて、かれを故郷にかえした。高位高官たちと首相を放ったまま、紂王は、背後の宮殿に連れて行かれた妲己の後を追っていった。

このとき以来、日々状況はひどくなっていった。紂王は妲己のそばから離れなかった。混乱が生じてあらゆるものが崩壊した。妲己のお気に入りの方が、忠実な旧臣を追い出し、優秀な高位高官を追放あるいは死刑に処した。美しく高貴な皇后姜は、地位を追われることになった。妲己は彼女の地位を奪い取ろうとしたからである。中国で最も古い詩集キアン（Kiang）には、不幸な姜の感動的な詩が伝えられている。

ああ太陽の君よ。ああ月の君よ。  
あなたがたは地上を照らす。  
しかし、そうした人間は、  
古い習慣を尊ばない。  
どのように、安心することができるのか。  
私のところにもはや戻ってこない人が。  
ああ太陽の君よ。ああ月の君よ。  
あなたがたは大地に灯を照らす。  
しかしそうした人間は、  
敵の愛情を知ることはない。  
どのように、安心することができるのか。  
私への感謝から逃げようとする人が。

ああ太陽の君と、ああ月の君よ。  
東にいるあなたがたは天に向かって行く。  
しかし、そうした人間は  
徳を栄光に高めない。  
どのように、安心することができるのか。  
そのように私を忘れ得る人が。

ああ太陽の君と、ああ月の君よ。  
あなたがたは、東から天へと昇る。  
ああ、父も、そして、ああ母も、  
私にいつも食事を保証するわけでない。  
どのように、安心することができるのか。  
わたしをそのように慰めがいのある人が。

最後には、妲己は皇后を誹謗し、彼女の夫の命を狙った。彼女に自白を問い詰めるために、妲己の目の前で、彼女の目がくりぬかれた。それでもまだ目的が達成されなかったの  
で、両手が焼かれ、その恐ろしいほどの痛みによって、皇后は亡くなった。

皇后の2人の息子たちは、母親の死を悼んだために投獄された。しかしかれらが絞首刑  
に処せられるとき、道教の賢者が操る突然の厚い雲がかれらを刑場から連れ去った。

妲己は、今皇帝を完全に手中におさめた。彼女の残酷さは、常に途方もない形で表され  
た。彼女は大きな鉄製の窯を作らせた。その窯は、燃えるような炎に熱せられていた。2  
人の年をとった信頼のおける高官は、皇帝に、本来の義務を思い起こさせようとしたた  
め、鎖でこの窯に結わかれてゆっくりと焼き殺された。

哀れな民衆は、信じられないほどの浪費を補うために、堪え難い税でもって苦しめられ

た。つまり妲己のために、極上の材木と最高級の石材を使った巨大な塔が、建設されることになったのである。巨大な庭園が造られ、そのなかを裸の男女がたわむれている。彼らの食事のため、あらゆる樹木に最上の肉が掛けられた。庭園の中央には、池があり、その端まで酒が注がれていた。紂王は酔って野蛮に振る舞う光景を妲己とともに楽しんだ。

絶望と恐れが至るところを支配し、野蛮な Hiung-nu Barbare が、富の限界を脅かしていた。そこで、ついに封建領主が文王（Wenwang）の辺境伯の息子であった武王（Wu-wang）と手を組んで、皇帝の無秩序な軍隊を攻撃した。皇帝は最終的に全員から見捨てられ、燃え盛る城で自らの生涯を閉じた。

皇帝を見捨てた妲己は、最高の宝飾で豪華に身を飾り、彼女の魔力を、今度は戦いに勝った者を試すためにその者のところに向かった。

武王を彼女は豪傑な兵士に命じて斬り殺させ、さらに遺体をばらばらにしたのであった。



图4 晓斋《百鬼夜行 部分》



图5 晓斋《百鬼夜行 部分》



图6 晓斋《百鬼夜行 部分》



图7 晓斋《百鬼夜行 部分》



图8 晓斋《百鬼夜行 部分》



图9 晓斋《百鬼夜行 部分》



図3 国芳《百鬼夜行》



図125 国芳《死んだ狐》



図124 国芳《ポルターガイスト》



図122 国芳《三つ目》



図11 国芳《化け物屋敷》



図26 貞秀《龍》



図30 石燕《燭陰》



図27 国芳《俵藤太と竜王の娘》



図28 豊国《法然上人が竜王の娘の病を治癒す》



図121 国芳《見捨てられた復讐魔》



図29 石燕《清姫》